

土佐山内氏家臣大庭氏の中世系譜認識と「軌跡」

—大庭健氏蔵『大庭氏世系図』の紹介を兼ねて—

湯 浅 治 久

専修大学文学部教授

はじめに

中世武士の展開は多様な様態をみせる。近年の武士論が明らかにするところによれば、開発地のみ土着して生きるという、「二所懸命」の認識はもはや過去のものとなっている。中世において武士は一族内の分業をともなつて列島各地に展開し、活動の痕跡を残す場合が少なくないのである。^{〔1〕}

しかしその同族の展開ないしは関連を明らかにできる氏族は限られていることも事実である。各地に痕跡をみせながら、その同族的な展開を把握しうる史料に恵まれない武士も数多い。本稿で対象とする東国武士大庭氏もそういった一族である。相模国大庭御厨（現在の藤沢市・茅ヶ崎市付近）を本貫の地とする大庭氏は、桓武平氏の系譜をひく鎌倉党の雄族でありながら、治承・寿永内乱に際して、大庭景親と同景能が平氏方と源氏方に分裂して以降、その動向については不明な点が多く、系譜的な実態すら明らかではないのが現状であった。^{〔2〕}

そのようななか、今回紹介・検討する機会を得た近世土佐藩山内氏家臣大庭氏（便宜以降、「土佐大庭氏」と称する）のご子孫である大庭健氏蔵『大庭氏世系図』は、貴重な素材であるといつてよい。周知のごとく、山内氏も相模国の出自を名乗る東国武士の系譜をひく武士である。筆者が本史料に関心を抱いたのも、ともに東国武士を出自にもつ山内氏・大庭氏の系譜に興味をひかれたからである。そして一見したところ、土佐藩の大庭氏は鎌倉党に出自をもち、その後南北朝・室町戦国期を通じて世代を重ねてきたという系譜認識を有していた。そこには興味深い記載もあり、また東国武士がいかなる転変を重ね近世の大名家家臣へと転成を遂げるのか、という課題についても併せて検討できる記述もあることがわかった。これが本稿でこの史料を紹介・検討する所以である^③。

そこで以下、まず『大庭氏世系図』の基本的な性格について明らかにし、さらにそこにみられる中世大庭氏にかかわる系譜を検討する。そしてさらに土佐大庭氏と、東国武士大庭氏をつなぐ「ミツシゲ輪リン」について、現段階で得た若干の知見を披瀝することにした。

一、『大庭氏世系図』の成立

ここではまず、本稿が対象とする『大庭氏世系図』の史料性格についての検討からはじめることとしよう。ここで言う『大庭氏世系図』には伝本が三点ある。以後古いものから便宜、甲本・乙本・丙本と略称する。甲本は表紙に「寛延元辰年 先祖書指出 閏十月二九日 右御留守居組頭 大庭彦三郎」とあり、縦30 cm×横23・5 cm、紙一枚六枚（含表紙）の和綴本である。表紙裏の記載から、寛延元年（一七四八）に作成され、宝暦三年（一七五三）に藩に調え提出されたものであることがわかる。世系は景自（寛永九年（一六二四）—元禄八年（一六九五））か

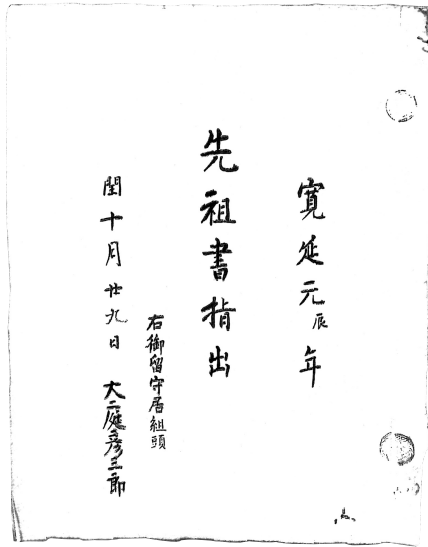
ら以降となっている。正確に言えば、この本は他の系図とは成立が異なるものとなる。

一方、乙本は表紙に『大庭氏世系図』と貼り紙がなされ、縦27 cm×横20 cm、茶色の表紙・裏表紙をもち、帳数三四丁の和綴本である。内容は「大庭氏世系之図」として平姓・家紋の説明のあと、人皇五十世・桓武天皇から出、上総介として東国に下向した平高望以降の桓武平氏の系図・事績を載せる。文字は宝暦九年(一七五九)の景俊の事績の途中まで一筆であり、この頃までに成立したものと一応は考えられる。付箋が数カ所に貼られており、世系を勘案した形跡がある。これに対して丙本は縦27・3 cm×横20 cmと大きさと装丁がほぼ同じだが、表紙・裏表紙が紺色である。帳数は四五丁であり、乙本と途中までは同一の内容であり、乙本を追補して作成されたものである。文字をみると文化一四年(一一八一)の景保の項までが一筆であり、おそらくこの頃に成立したものであり、以降いく筆かの別筆で書き継がれ明治に及んでいる(図1を参照)。

つぎにこれらの関連と成立についてだが、まず甲本が土佐藩の意向を受けて大庭氏から藩に提出されたものであることを踏まえると、他の乙・丙本も含め、土佐藩の主導による家臣の系譜調査に際して作成されたと推測することができよう。⁽⁴⁾したがって一八世紀半ばまでに、それ以前の自家の系譜についての何らかの資料が残されていたことは確実であろう。

問題は、その原「資料」の性格だが、これについての情報は少ない。しかしわずかだが見逃し得ない情報がある。乙本には二箇所ながら作成者が異本を参照したとおぼしい記載がある。まず室町期の政道の記載「薙髮而号円人」に続けて割注に「私云入歟、如本写之」とある。政道の法名について、乙本の記主が疑義を持ち独自に勘案しており、結局は「本」のように写したということであろう。さらに戦国期の景長について「母卒去之年紙虫喰不見」とある。つまり乙本は、明らかに異本(「本」)を参照しているのである。この「本」こそ、中世の家譜情報を記した

甲本



丙本



乙本



図1

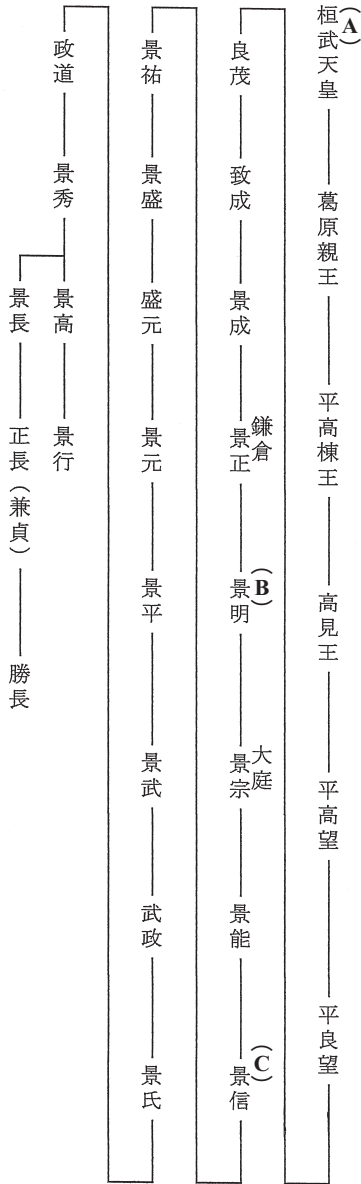


図2 土佐大庭氏中世略系図

『原』大庭氏系図』に他ならない。それが乙本の作成の時点で、甲本とは別に存在していたのであり、それこそが土佐大庭氏の中世以来の系譜を記す「原」資料であったことが理解されるのである。

これらの三つの『大庭氏系図』(以下、『世系図』と略す)は龐大なもので、全体をここで到底紹介できないので、まず『世系図』の当初から近世初頭までの系図を復元したものを「土佐大庭氏中世略系図」として掲げる(図2)。ここからまず土佐大庭氏の系図としての基本的な性格を検討しておこう。このうち(A)とした部分、桓武天皇から鎌倉景正までの世系は、『尊卑分脈』とほぼ同一である。また、(B)とした鎌倉景明から大庭景宗―景能の世系は、『系図纂要』と一致する。しかし(C)とした大庭景信から近世初期の勝長までの世系については、基本的に他の史料からは確認することができない。したがって(C)の記載を勘案することで、東国武士大庭氏から土佐大庭氏までの一つの転変の様態を窺うことができることになる。従来この点についての情報がまったく不明で

あったことから、これは貴重な記述であるというべきである。

しかし、(A)・(B)段階における鎌倉党―大庭氏の系譜(系図)も、実際のところかなり錯綜したものであったことを、ここで指摘しておかねばならない。石井進氏は⁵⁾上に掲げた二つの系図の他、『正宗寺本鎌倉党系図』をあげて相互の関係を検討しているが、大庭御厨の開発領主である景正(政)に至るまでの系譜も一致せず、また諸史料を勘案すると、景正以降の鎌倉党の武士も、いくつかの系統が分かれ対立や紛争をはらんだものであったことが明らかにされている。また、平家方について死罪となった大庭景親、富士の巻狩りの直後に何故か失脚したという源頼朝の股肱の臣である景能の子と目される大庭景兼が『吾妻鏡』にみえるが、和田合戦で討死して以降、大庭氏の系譜は不明となる。また事績がある程度知られる後裔も、やや離れた三浦半島の地名で、三浦氏に近い「長江」を名乗る点なども、こうした混乱に端を発している可能性もある。この点は本稿の主題ではないので、これ以上立ち入らないが、土佐大庭氏の初期段階の系図も、(A)と(B)を意図的に継いで作成されたものであることを指摘して、その系譜的問題も後考を待つべきものであるとしておく。大庭氏の世系は当初から検討が難しいものであったことを、踏まえておく必要がある。

二、土佐大庭氏の中世系譜認識

さて、以上を前提として、(C)の部分の概略を乙本の記述から紹介してみよう。

【鎌倉期】

景信から景元の五代が相当する。景信は頼朝に仕え奥州合戦で戦功をあげ、「前川庄一千余貫」を賜った。つぎの景祐は実朝に仕え和田合戦・承久の乱で活躍し、「豆州之熱見庄」を賜り、建長元年(一二四九)に「駿州矢部観音堂」の建立の際には奉行を務めた。つぎの景盛は建長五年(一二五三)に青砥藤綱の妹を娶り、文永八年(一二七一)には子盛元に家督を譲る。また弘安三年(一二八〇)には「美作国久心寺」を建て開基となっている。つぎの盛元は永仁三年(一二九五)、北条貞時の命に背き「羽州由利」に配流されている。つぎの景元は文保二年(一一三八)に近江「大津宿」の代官となり、正慶(元弘)の乱に際しては新田義貞の手に属したが、病を得、建武元年(一一三四)に卒した。

【南北朝期】

景平から武政の三代が相当する。景平は足利尊氏に属し各地を転戦し、貞和五年(一一三九九)に「上野沼田」三千貫、「相州」に千貫の「采地」を得、さらに延文二年(一一三五七)には「前橋宮方」の大館有朝を攻め五千貫を領するが、その後「宮方」に属し尊氏の怒りを買ひ、佐々木道誉と合戦に及ぶ。景平は「沼田城」を攻められ信濃に通れる、また奪還を企てるが同三年に死去する。子の景武は延文五年に將軍家に赦され「沼田城」に居り、相模に千貫の「采禄」を賜り応安七年(一一三七四)に死去、子の武政には事績がない。

【室町期】

景氏から景高の四代が相当する。景氏は武政の子で、応永三〇年(一四二三)に「房州駒込城」を攻め、「太田持高」に殺されたという。孫の景秀は文明七年(一四七五)に「上杉左馬頭」の命により、武州河越の謀反人北条

祐綱と各務原仲平らを殺した武功により「相州木下庄」を得て城を構える。しかし延徳二年（一四九〇）に上杉氏に謀叛の咎を掛けられて合戦に及び、長子景家、二男景治は命を損なった。三男景文、四男景勝が防戦するなか、父景秀は五男景高とともに「豆州真鶴」に隠遁するが、景文と景勝はこの時自殺した。景秀は永正元年（一五〇四）に豆州にて卒した。

【戦国・織豊期】

景秀の五男景高とその子である景行、また六男である景長とその子である正長（貞兼）、その子勝長の世代が相当する。ここで世系が二つに分かれ景高と景長の兄弟とその従兄である景行と正長の事績が中心となる。

まず景高は今川に仕えるとあるが事績はそれのみである。子の景行は、天文九年（一五四〇）に「三州」に來、源（松平）広忠に謁した後、松平家康に仕える。家康が「三州豊藏寺」で学問をした際にもこれに随い、天文一八年に（一五四九）広忠が逝去のあと、家康が「尾州名護屋」に蟄居の際にも随っている。やがて永祿年間、三河岡崎を拠点に「寺部城」を攻めた際などに扈從の臣として活躍、天正一〇年（一五八二）の織田信長弑殺の際の、家康の伊賀越えの折りに、伊勢よりの船中で不幸にも頓死を遂げた。

これに対し、景長の事績は先に述べたように原「家譜」の脱落もあつて伝わらず、子の正長の事績が中心となるが、それは従兄である景行と、ある種競い合うようなものとして描かれる。正長は天文二二年（一五五三）に遠州に生まれ、以降徳川家康が「駿州臨濟寺」で手習いの際に御前で硯水を取るなどしたが、やがて元龜元年（一五七〇）になると遠州から甲斐国に赴き、同三年の三方原合戦においては武田信玄に随い武功をあげた。その後天正元年（一五七三）に信玄が死去した後は、豊臣秀次に仕え、天正一八年（一五九〇）の小田原北条氏の討伐の際に

は「秀次卿母衣之列十三人」の一人に「大庭土佐(守)」として列している。秀次が謀叛の咎により失脚の後は石田三成に仕えるが、関ヶ原の戦いで石田が敗れた後は、山内一豊に「年来之交」にて属し、土佐の幡多郡中村郷に住した。しかし正長の遍歴はこれで終わらず、慶長一九年(一六一四)の大坂の陣にも織田頼長の手の一人として出陣し活躍する。寛永四年(一六二七)に七五才で卒したとある。

*

*

*

以上を受けまず指摘しておかねばならないのは、これらの歴代の事績が「事実」であると俄には実証できないことである。一般にこうした家譜が家を様々な事績により飾ることはありえることで、むしろそうした性格がゆえに家譜が成立するとさえ言い得る。とくに鎌倉期以降、「」で括った固有名詞を歴史的事実として論じることには慎重であらねばならない。これを裏付ける史料を徴することが現在のところ筆者にはできないからである。

しかし、このことをもって『世系図』そのものの価値を全く減してしまうのも正しくはない。その理由はいくつもある。一つには我々の知識以上に実際の史実の広がりがあることを否定し得ないことがある。なかなか難しいが、今後の精査次第では史実と把握し得る可能性も否定できない。そして二つには、さきに述べたように、こうした系譜認識のもとになる原「資料」が土佐大庭氏に伝来していると考えられることであり、それを生み出した中々近世の武士の「家」意識こそを歴史的に問題とすべきであるからである。そこで本稿における考察は、こうした意識を生み出した「事実」の痕跡を、系譜認識から探る、という方法を探りたい。そこに土佐大庭氏の歩みを垣間見られる可能性があるからである。

この視角からまず、大庭氏の中世系譜認識におけるポイントを指摘してみよう。まず①、鎌倉時代には幕府御家人として東国で活動していた大庭氏が、南北朝期以降は基本的に足利氏に従う、という点である。その後、②、室

町期には足利氏重臣の上杉氏と確執を持ちながらも引き続き東国で活動していたが、一五世紀末に戦乱で家が没落し、兄弟・従兄に分裂する事績を持つ、という点、そして③、戦国・織豊期には東国を離れ、東海に活動の場を移し、今川・徳川・武田といった大名たちと関係を持ち、さらに豊臣大名である豊臣秀次や石田三成らと関係を持ち、その過程で山内氏と邂逅する。とくに戦国期以降は記述も多く詳細になる点、の三点である。この特色は、そのまま東国武士大庭氏が土佐大庭氏へと変貌してゆく過程を大枠で表現している、と言ってよいだろう。以下ではこれらの点を踏まえながら、別に史料を徴することで、大庭氏の転変をでき得るかぎり検討してみたいと考える。

三、東国武士大庭氏の転変

【諸國の大庭氏】

まずは定石どおり、太田亮『姓氏家系大辞典』（角川書店）第一巻の「大庭 オホバ オホムハ オホニハ」の項を引き、さらに「大場 オホバ」項を参看し、諸國の大庭（大場）氏を確認してみよう。結果一四の「大庭氏」を見いだせるが、直接は関係がない和泉・河内の大庭造、美作の大庭臣、陸前大庭氏、宇都宮流大庭氏、藤原北上杉氏流大庭氏、石見・豊前・筑後の大庭氏をひとまず除くと、注目すべきは以下の氏族である。

桓武平氏鎌倉流は本宗として除き、①、武藏国荏原郡の大庭氏。これは武藏の吉良氏の四天王であり、井伊家の代官役とある。これは世田谷吉良氏の家臣より起こった大庭（大場）氏であり、足利氏との関連を示唆する。②、陸奥岩代二本松の大庭（大場）氏がある。これも畠山氏および石橋氏の家臣とあり、①と同様に足利氏との関連が問われよう。この①②は平姓大庭氏の本貫地相模とも関連があり、一括して後に論じたい。

また③、三河の大庭(大場)氏が注目される。この大庭氏は渥見郡阿志神社旧社家(現愛知県田原町に所在)とあり、大場氏の場合は深溝城主・大場次郎左衛門がある(現愛知県幸田町深溝)。三河国は『世系図』に景行の来往が描かれた地で、かつ足利氏と関連が深い。検討に値するのでこれも後で取り上げたい。さらに④、遠江の大庭氏がある。これは佐野郡大庭邑より起こる、とある。遠江国も『世系図』に正長の生国として登場し、かつ三河国とも隣接しており、後に述べるように独自に検討する必要がある。以上のように、平姓大庭氏と『世系図』に關わる大庭(大場)氏の探索の手掛かりをつかむことができた。以下でこれらをさらに検討してゆこう。⁽⁶⁾

【相模・武蔵国の大庭氏】

まず相模国における大庭氏についてみよう。平姓大庭氏の動向は不明ながら、鶴ヶ岡八幡宮の小別当として大庭氏が見える。小別当は鎌倉時代よりみえる職掌で、八幡宮にあつて社内の掃除や御供及び御燈のことを奉行する。くだつて室町期以降の鶴ヶ岡八幡宮関係の史料には、大庭宮能・弘能などの名が散見され、また『相州文書』には小別当がかつて保持していたであろう『大庭文書』が収録されているが、原本は散逸している。⁽⁷⁾ この大庭氏の系譜は、一説によると平姓大庭氏からであるとされるものもあるようだが、詳細は不明である。鎌倉の膝元にいるこの大庭氏の系譜の検討は、今後の課題であろう。

つぎに武蔵国荏原郡の大庭(大場)氏だが、天正二〇年(一五九二)の東京都世田谷区の勝国寺蔵木造薬師如来三尊像の胎内文書に「拾二神六鉢分願主 大場越後守」とあることから、少なくとも戦国期には存在しており、世田谷郷の領主吉良氏の家臣であった。⁽⁸⁾ その後、近世に世田谷郷が彦根井伊氏の所領に編入されると、その代官に任命される。世田谷区に現在も残る代官屋敷は大場氏の屋敷である。⁽⁹⁾ 吉良氏は三河国幡豆郡吉良庄を本貫とする足利

氏の一族でかつ有力被官であり、世田谷の大庭（大場）氏は足利氏・吉良氏との関わりが推測される。世田谷吉良氏は奥州で活躍したのち、鎌倉公方足利氏との所縁により一五世紀の初頭には世田谷に土着した一族である¹⁰。吉良氏と荏原郡の大庭氏との接点は、相模・武蔵の武家社会か、奥州での活躍期（さきの石橋氏や畠山氏との関連をみよ）、あるいは後述の三河国における大庭氏の活動のいずれかであろうが、そのいずれにせよ、足利氏と関わりがあることになり、土佐大庭氏の動向と一致している。

〔三河国の大庭氏〕

そこで三河国の大庭氏についてみたい。三河国は足利氏が鎌倉時代に守護をつとめた重要な拠点であり、一族の本拠地が多く、吉良氏の本貫地である吉良庄も存在する国である。この三河国では大庭氏にとつて重要な所見が得られる。まず観応元年（一三五〇）十二月に、三河国額田郡では足利氏被官の「一揆」が形成されるが、そのなかに大庭氏が確認できるのである。史料をあげよう。

（花押影・足利直義）

於參河国額田郡、去_元観応十二月十日、揚御旗一揆人数交名注文事

粟生藤左衛門尉為広 築田平太資国

山室四郎左衛門尉俊秋 宮重新右衛門尉定平

河路左衛門三郎家兼 鹿嶋中務丞頼広

（中略）

高宮左衛門三郎義景

梶山左衛門三郎宗高

同八郎宗弘

同彦三郎宗俊

同五郎宗重

大庭弥平太氏景

(中略)

已上式拾壹人⁽¹¹⁾

観応元年(一二三〇)は、足利尊氏・直義の対立「観応の擾乱」が惹起される年だが、この交名は直義が関東へ没落する直前に作成され、直義が花押を据えたものである。つまりこの武士たちは直義党の足利氏被官ということになる。⁽¹²⁾

彼らが直義の「御旗」のもと、「一揆」を結成しているのであり、これは足利氏被官による「額田郡一揆」と称されるものである。そしてそのなかに「大庭弥平太氏景」(傍線部)が確認されるのである。この三河大庭氏は「景」を名乗っており、これが平姓鎌倉党大庭氏の主な通字であることから、平姓大庭氏の一流としてよいだろう。

新行紀一氏によれば、鎌倉期に足利義氏が額田郡地頭職を得て以来、同地にはその被官である高・粟生・倉持・大平・坂上・伊勢・板倉・和田の諸氏らが散見されるといい、交名にもそれらの名が記されている。⁽¹³⁾ただ、これら伝統的な被官のなかには大庭氏の名は確認できない。しかし『太平記』卷二八には、同年七月、中国地方で足利直冬勢と戦う高師泰の軍勢のなかに「大庭孫三郎」が確認できる。この大庭氏は当時三河国守護であった高師泰の被官であろう。つまり大庭氏には直義方と高方にそれぞれ一族がいたことになる。したがって、三河大庭氏が南北朝には足利氏の被官であったことは確実であるが、他の諸氏とは違うかたちで足利氏にしたがったことになる。

それは関東での大庭氏の存在が希薄になったことと関係があり、三河国に新天地を求めたことを示唆しているのではあるまいか。

つぎに、額田郡の大庭氏がさらに寛正六年（一四六五）に、ふたたびつぎの史料にあらわれることを確認したい。

額田郡牢人交名・注文（折紙）・

一 丸山中務丞（子）父ハ為此事
本人討死

一 同名彦三郎中務弟也

一 同弟出家 兩人

一 大庭次郎左衛門（尉）・

一 同弟長満寺

一 （尾尾）・同子七郎三郎（太）

一 高力

（中略）

以上此分

貞雄 親元

裏封（尾） ※（ ）は別本奥書による異同の注

この史料は、寛正六年の段階で、三河額田郡でふたたび「牢人」の一揆が形成されたことを示している。そのな

かに「大庭次郎左衛門」(傍線部)が確認できる。この「牢人」たちについて、前掲の『新編岡崎市史 中世2』は以下のように記している。すなわちこの「一揆」は、当該期に室町幕府將軍足利義政に対してむすばれた「一揆」であり、おそらくは対立する鎌倉公方足利成氏の意を受けて結成されたものである。それゆえ、義政はこの「一揆」の討伐を政所執事伊勢氏に命じ、ほどなくこの「一揆」は収束をみた、と。当該期の政治的な去就はさておき、さしあたり三河国の大庭氏が一五世紀半ばに至っても三河国に「牢人」として土着していることを確認したい。「牢人」とは幕府側からみた呼称であり、実際は「国」(地域)の有力領主、すなわち「国人」であった、ということになる。

ではこの大庭氏の本拠地はどこであるのか。『新編岡崎市史 中世2』は、大庭氏の菩提寺として愛知県幸田町深溝の日蓮宗寺院長満寺をあげ、同寺の縁起で正慶元年(一三三二)に「大場朝泰」が深溝城に移住したとあることを紹介している。かつて太田亮氏が採集した深溝の大場氏と、三河における足利氏家臣大庭氏を、ここに結びつけることができた。

この点で注目すべきは、史料に「大庭次郎左衛門尉」の「弟長満寺」「同子七郎三郎」とある点である(傍線部)。この「長満寺」が、さきにみた深溝大庭氏の菩提寺長満寺であることは確実である。この場合、長満寺とは、大庭氏の一族が檀那か僧侶として開基した寺院であろう。当時から日蓮宗であるかはともかく、在地領主または土豪の子弟が関連寺院に入寺し一族の菩提を弔うことは、一般によくあることであり、その意味においても、深溝の大庭氏が、観応の時代の大庭氏の後裔であり、かつ土着して城郭を築く勢力を持つ地域領主であったことは確実であろう。

ところで深溝城は、その後三河国松平氏の一族である深溝松平氏の居城となる。その祖忠定が大庭(大場)二郎

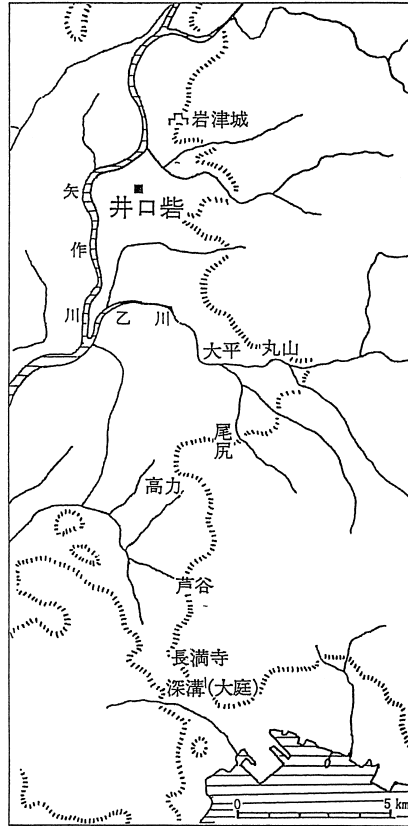


図3 寛正6年額田郡一揆関係図（『新編岡崎市史中世2』より引用）

左衛門を討って手に入れたと『寛永諸家系図伝』『寛政重修諸家譜』などにはあるが、実際は祖父正則の代であるという。いずれにせよ、松平（徳川）家が深溝大庭氏を滅ぼして深溝城を居城にしたことは事実であろう（図3として周辺の地図を掲げる）。

しかし深溝松平氏の家臣団などには大庭氏は見当たらない。やはり深溝大庭氏は、その後の三河国には存在していなかったであろう¹⁵⁾。

さて、以上述べてきた三河国の大庭氏については、土佐大庭氏との関わりが濃厚にうかがわれるのではあるまいか。

『大庭世系図』は景行の三河における松平広忠・家康との接触を記述する。その記載はともかくとしても、三河国に足利氏被官としての大庭氏が存在していたことは事実であり、松平氏との接触(実際には戦争による排除だが)も明らかである。¹⁶⁾この三河大庭氏の事績が、土佐大庭氏の系譜認識に流れ込んでいる可能性はかなり高いのであるまいか。さらに言えば、土佐大庭氏のルーツを、この足利氏被官である深溝大庭氏に求めてもよいように思われるのである。

【遠江国の大庭氏】

つぎに遠江国の大庭氏について述べよう。さきの太田亮氏の指摘を受けて『戦国遺文 今川氏編』を検索したところ、京都大学総合博物館の所蔵にかかる、つぎのような史料に接した。¹⁷⁾

遠江かし日記

↙ 此内四百文うけとり申候、

壹貫貳百間、此間松下善久入道殿代子銭自□□出候、

金壹両料足四百文、同松下善久入道殿かり、六月十七日

(中略)

引馬未進かし銭

六貫四百文、半城上様御かり 飯尾右衛門尉殿 此内三メ二百文

うけ取申候、

大庭但馬守殿兩人、御一筆二候、

三貫文、江馬五郎衛門入道殿 三文字十二年利不出候、
かり

壹貫四百五十文、あさいな八郎三郎殿かり申候て、するかふ中へ
御文をとり御しさい申まい
らせ候、

壹貫文、松下源太左衛門殿かり此西 とり
十二月日

式貫文、松下源太左衛門殿かり さかいにて、いぬ
かし申候、 二月日

(中略)

以上合

永禄十一年十月吉日

光高(花押)

まずここから、永禄一二年(一五六八)の遠江国に、「大庭但馬守」を名乗る人物を確認できることを指摘したい(傍線部)。戦国期の遠江には大庭氏が確認できるのである。ではこの史料は如何なるものであるのか。若干検討しよう。

この史料は、京都大学総合博物館蔵『幸田文書』に所収されているものである。『幸田文書』は全二七通の史料群であるが、原史料を検討したところによると、伊勢神宮の御師である幸田氏の所蔵にかかる文書群であることが

判明した¹⁸。とくに近世初頭の慶長年間には、幸田光永が三河・遠江・信濃三国の道者を把握していることが史料から判明し¹⁹、この点から考えて、永禄一年の「光高」は「光」の通字から幸田氏であり、中世から遠江国の道者職を把握している御師であった可能性が高いことが指摘できよう。

この観点からこの史料を把握するならば、伊勢御師が遠江地域で信仰を拡げると同時に金融行為を行っていることが指摘できよう。伊勢御師は信仰と経済を融合させた信用経済の担い手であり、この史料も今後、伊勢神宮と関係が深い遠江国の地域権力との関連で考察されるべきである²⁰。この点については後日を期したい。

ところでつぎにここに登場する人物であるが、遠江の引馬の飯尾氏、松下氏、江馬氏らこの地域に展開する武士の名字を持つものが多く、特に引馬飯尾氏は、引馬城による戦国期の遠江を代表する地域権力である。ただしこの史料の彼らは、現在まで知られている飯尾氏、松下氏、江馬氏らの実名には該当しない人物ばかりで、おそらくは庶子あるいは家臣筋の人々と推測できる²¹。そしてその中に混じって、従来は知られていなかった「大庭但馬守」が出現したわけである。

周知のように、引馬飯尾氏は徳川家康に滅ぼされ、家康によって該地には浜松城が建設され、徳川氏の一拠点となる。してみると、ここに確認された大庭氏も、その後徳川氏と接触してもおかしくない存在と言える。「世系図」において大庭氏の一類が遠江に展開しており、やがて徳川氏と接触する、という記述は、こうした遠江大庭氏のおかれた状況を反映していた可能性はあるのではあるまいか。この点、近世において山内家の家老職にあった孕石氏について言及したい。孕石氏は山内家の重臣だが、その出自については所見が得られない²²。しかし諸史料に徴すると、孕石氏は遠江国原田庄を領した原氏の一族で、その後今川氏の家臣となり文書を残している一族を出している²³。土佐の孕石氏の出自として、この遠江孕石氏を位置づけて良いのではあるまいか。そうであれば、同じ遠江に出自

を持つ大庭氏―その一類は三河国の大庭氏と族縁関係を持つかもしれないが、孕石氏とともにのちに山内氏に召し抱えられた可能性も出てくるように思われる。

また、さらにさかのほれば、遠江大庭氏が展開した地域に存在する浜松庄は、三河吉良氏の所領であった時期があり、大庭氏の系譜を考える際、ここでも吉良氏一族との接点も想定することが可能である。この点も今後留意する必要があるろう。

おわりに

以上、いささか煩雑にわたったが、現在可能な限りで実際の大庭氏の痕跡を諸史料に探ってみた。「二」末尾で示した土佐大庭氏の中世系譜認識における留意点に即して、最後にその展開と土佐大庭氏との関連を整理して本稿を閉じよう。

『世系図』からみた土佐大庭氏の軌跡でポイントとなる点は三つあった。まず足利氏との関連だが、吉良氏との関連もふくめ、武蔵・相模、三河における大庭氏の展開が密接に関連することを確認できた。つぎに三河―遠江に展開する大庭氏は、まさに東国から東海地域に活躍の場を移した大庭氏の姿を映し出している。そして両地域における国人としての活躍が、やがて諸大名との接触を深め、そして山内氏の配下となる、以上である。

『世系図』は、これを独自の世界として描いているものであると考えられる。中世史料にみられるその姿を追ってみると、その背景には以上のような実像が存在したことになる。これは、土佐大庭氏が生きてきた世界をまさに彷彿とさせるものであった。またこれは、東国武士である大庭氏が、やがて土佐大庭氏へと連なる一つの「軌跡」

をまぎれもなく意味している、と言えるものと考える。

まことに中世武士の転変は多彩な様相を見せる。『世系図』はその一端をまさしく語っていたのである。この論考において、その一端なりとも描き出せたとすれば、筆者としても幸いである。

【付記】専修大学文学部哲学科教授大庭健氏は、筆者が専修大学に赴任した当初に、ご所蔵になる『大庭氏世系図』の諸本の存在を示され、その研究を促された。今回、その中世部分なりとも、わずかながらであるが、所見が示せたことを幸いとし、大庭先生のご教示に感謝したい。

注

- (1) こうした研究動向については、さしあたり井上聡「御家人と荘園公領制」(五味文彦編『京・鎌倉の王権』吉川弘文館、二〇〇三年)、秋山哲雄『都市鎌倉の東国御家人』(『ヒストリア』一九五、二〇〇五年)などを参照。なお筆者もこうした視角から主に千葉氏を事例として武士論について研究している。拙著『中世東国の地域社会史』岩田書院、二〇〇五年、同『蒙古合戦と鎌倉幕府の滅亡』吉川弘文館、二〇一二年参照。
- (2) 大庭氏の系譜(系図)について言及しているものとしては、石井進「相武の武士団」(『鎌倉武士の実像』平凡社、一九八七年、初出一九八一年)が最も詳しい。その他湯山学「相模武士一 鎌倉党」(戎光祥出版、二〇一〇年)、関幸彦『その後の東国武士団』(吉川弘文館、二〇一二年)をあげるにとどめる。
- (3) 中世武士の系譜(系図)研究は膨大な蓄積があるが、近年の代表的な成果としては峰岸純夫・入間田宣夫・白根靖大編『中世武家系図の史料論』上・下(高志書院、二〇〇七年)がある。しかしそこにおいても近世を意識した研究は少ない。この点、近世藩の中における中世武士の系譜認識を追求した前嶋敏「米沢藩中条氏における系譜認識と文書管理」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一八二、二〇一四年)は貴重な成果であるが、未だ検討課題の多い分野と言えよう。
- (4) 土佐山内家宝物資料館の藤田雅子氏のご教示によれば、土佐藩では「御侍中先祖書系図牒」なる家臣の系譜の書き上げが作成されており、一見したところ、甲・乙本とほぼ同じ大庭氏の世系が調査されていることが判明した。この牒の成立などについては精査が必要であるが、今後の課題とした。しかしこの事実により、甲・丙本が土佐藩の系譜調査と密接に関連するものであ

ることは容易に推測できよう。貴重な資料の所在をご教示いただき、同牒の大庭氏関連部分の複写を恵与された藤田氏に深く感謝したい。なおこれらのご教示は二〇一六年八月二十七日の土佐の現地および資料館の調査の際に頂戴したものであることを記しておく。

(5) 石井前掲「相武の武士団」。

(6) なおこれらとは別に、戦国期の毛利氏家臣に大庭賢兼がいる。彼は『源氏物語』の注釈を集大成した武士として著名である。

米原正義『戦国武将と茶の湯』（吉川弘文館、一九八六年）一二頁参照。なお近年、大庭賢兼の事績と系譜を詳しく究明した菅原郁子「源氏物語の伝来と享受の研究」（武蔵野書院、二〇一六年）があり、とくに第二篇第三章「大内家・毛利家周辺の源氏学―大庭賢兼を中心に―」が賢兼の系譜を詳細に検討している。それによれば毛利氏家臣大庭氏も桓武平氏鎌倉党の系譜を引くとするらしいが、東国からの転変の詳細は不明らしい。なおこの大庭氏は太田亮氏が説く石見大庭氏の一流とのことである。土佐大庭氏との関連についてはいまのところ不明とせざるを得ない。

(7) 鶴岡八幡宮の小別当については、『鎌倉市史社寺編』（鎌倉市、一九五九年）に記述がある。小別当大庭氏については山田邦明『鎌倉府と関東』（校倉書房、一九九五年）に閑説がある。また『相州文書』所収の『大庭文書』については、湯山学『中世の鎌倉 鶴岡八幡宮の研究』（私家版、一九九三年）に復元と紹介がある。

(8) この史料は、横浜市歴史博物館編『蒔田の吉良氏』（同館、二〇一四年）五七頁に所引。

(9) 『ぶ・ちゅうおうぶれす』七一（世田谷区立中央図書館、二〇一一年）「特集1 大場氏と代官屋敷」参照。

(10) 荻野三七彦『関東武士研究叢書4 吉良氏の研究』（名著出版、一九七五年）、谷口雄太『武蔵吉良氏の散在所領と関係地域』（品川歴史館紀要）二四、二〇〇九年）、『戦国期における三河吉良氏の動向』（戦国史研究）六六、二〇一三年）などを参照。

(11) 『額田郡一揆交名注文写』『尊経閣文庫所蔵文書』（『新編岡崎市史史料 古代・中世6』一一七三頁所引）。本文書は写であり、包紙ウハ書・端書などは省略した。

(12) 『新編岡崎市史 中世2』（岡崎市、一九八九年）二八一頁。なお同書は、本史料はもと粟生氏に伝来したもので、元禄一六年（一七〇三）に加賀金澤藩主前田綱紀が後藤某から借りて書写したものであることが跋文で判明するとする。

(13) 新行紀「足利氏の三河額田郡支配」（田中大喜編『下野足利氏』（戎光祥出版、二〇一三年。初出一九八〇年））。

(14) 『額田郡牢人交名注文写』『松平乗承家蔵古文書所収文書』（『新編岡崎市史史料 古代・中世6』一〇八〇所引）。同書「中世編解題」によれば、同文書は旧西尾藩主大給松平家の家伝文書の謄写本である。

(15) 深溝松平氏の事績と家臣団編成については、平野明夫『三河松平一族』(新人物往来社、二〇〇一年)、鈴木将典『三河国衆としての深溝松平氏』(久保田昌希編『松平家忠日記と戦国社会』岩田書院、二〇一一年)を参照。ちなみに『家忠日記』で著名な松平家忠は深溝松平氏の系譜をひく一族である。

(16) この場合、深溝松平氏に減ばされた大庭氏の一流が、松平氏宗家と接触しその家臣となることはあり得ることの一つであると思われるが、いまのところ「実証」はできない。

(17) 『戦国遺文 今川氏編 第四卷 補遺』No.二七三三。

(18) 二〇一六年一月一日、京都大学総合博物館において全体を見した。閲覧に際して便宜に預かった同館の谷徹也氏に感謝したい。ここで同文書および「遠江かし日記」の基本的な史料情報を記しておく。『幸田文書』は本史料「遠江かし日記」(以下「日記」と略す)を最古のものとし、以降、天正・慶長・正保・慶安・承応・明暦・寛文・貞享・元禄・享保・宝暦といった一七世紀～一八世紀半ばに至る二七通の文書群である。状態はうぶなままで折りたたまれていた。各史料にはラベルが貼られ整理番号が付されており、「日記」はNo.24である。全体を解説する余裕はないが、幸田源内(大夫)・幸田大夫を名乗る伊勢御師に関わる文書群であることは間違いない。この点、「日記」には、後述する遠江国の武士松下氏への貸借につき、「参宮時」とあり、伊勢参宮との関係が推測でき、この点で共通性がある。この史料群についての検討結果の公表は後日を期したい。

(19) 慶長九年(一六〇四)幸田光永証状(No.16)は、幸田胤藏に宛てた証状で、一族内部での道者職の譲与をめぐるトラブルに関するものであるが、そのなかに、この点の記述があるので左に掲げておく。

切紙にて申入候、三川・遠江・信濃合三ヶ所之御道者、親にて候了心持分一円其方江ゆつり候はん由、前々よりけいやくの事、親類共何も存候、今度了心其方をせつかんのために右之御道者之うちを我等などにもくれ候はん書付をなされ候由承候処、其後又兄にて候孫兵衛・半衛門方を以了心江其方理被申候処、了心被聞分、如前々其方江ゆつられ候事目出候、たとひ了心御覚悟相違候て不被聞分、其方へゆつりのうち、我等などに有共、申請候はん覚悟にて之無候、不及申候へ共、其故ハ件之三ヶ所之御道者之事ハ、其方若年より了心けいやく曆然に候間、不及沙汰候、此上ハ了心の書物いつかたより出候共、ほんこたるよし候、於子々孫々異乱煩有ましく候、為後日如件、

慶長九年申辰壬八月廿六日

幸田源左衛門尉

光永(花押)

幸田種蔵との まいる

この史料の記載、特に傍線部から、少なくとも慶長初年の時点で、伊勢御師としての幸田家が、三河・遠江・信濃の伊勢道者職を保持していることが判明しよう。

(20) 伊勢御師と金融活動の関わりについては、久田松和則『伊勢御師と旦那』（弘文堂、二〇〇四年）、千枝大志『中近世伊勢神宮地域の貨幣と商業組織』（岩田書院、二〇一一年）などを参照。

(21) ここに登場する人物については、『戦国遺文 今川氏編 第四卷』の人名索引、『浜松市史 一』（浜松市役所、一九六八年）、『浜松市史通史編 一二』（浜松市役所、一九七一年）、久保田昌希『戦国大名今川氏と領国支配』（吉川弘文館、二〇〇五年）第一編第二章三「遠州念劇」考、糟谷幸裕「境目」の地域権力と戦国大名（渡邊尚志編『移行期の東海地域史』勉誠出版、二〇一六年）などを参照したが、いずれも未確認の人物ばかりである。しかし遠江国の浜松庄、引馬周辺にいる武士であることは間違いないから、その一族であることは確実であろう。

(22) 土佐の孕石氏については、松岡司「土佐藩家老物語」（高知新聞社、二〇〇一年）を参照。同書によれば、孕石氏は山内氏の掛川時代以来の『御使母衣』の格式を持ち、元和五年（一六一九）に山内忠豊の守役を命じられ、寛文五年（一六六五）には家老本職となったという。

(23) 遠江孕石氏と『孕石文書』については、さしあたり村井章介「遠江国原田庄の地頭支配―孕石文書考―」（同『中世史料との対話』吉川弘文館、二〇一四年、初出一九九二年）を参照。